

校長ニューズレター(第22号・1月号) 宜野湾市立長田小学校校長:横山芳春



総合表現とは(連載1)

これから何回かに分けて、総合表現について紹介していきます。

「総合表現ってなに?」「こどもの何を育てるの?」「どうのうように鑑賞したらいいの?」などの、いろいろな疑問があると思います。これらの疑問にお答えしていきますので、保護者のみなさんの全員が読んでほしいと思います。

.....

総合表現は、長田小学校の教育ビジョン「1000の子どもに1000の未来~すべての子どもの可能性を開きのばす~」を実現していくものです。

①全員が主人公であることをめざします

総合表現は、特定の子どもが主役を務めるということはありません。多くの子どもが、脇役でガッカリするということもありません。子どもたち全員が主役であることを目指し、全員がその活動から喜びや感動を獲得できることをめざしています。

元大分大学学長の野村新氏はこう発言しています。

「学校教育における表現活動には、本来、主役や脇役があってはならない。子どもがみんな相互に自分の作品をつくり出す主役であり脇役である。」

「主役と脇役、“その他大勢役”は、“できる子”、“できない子”として差別され、主役はもてはやされ羨望されて優越感に浸り、“その他大勢役”は軽蔑され劣等感と無力感のなかにいる。」

一般におこなわれている学校での劇は、主役は終始主役であり、脇役は終始脇役です。教育の現場ではすべての子どもが主役として活躍できるようにすべきです。そのように決意してこそ、すべての子どもの可能性を開きのばすこ

とができるのではないのでしょうか。

②ストーリー(筋)を追っていくというよりも詩的な雰囲気表現していきます

この点、“劇”をイメージしている方には、期待はずれにみえるかも知れません。劇のように筋をみせていくものではありません。鑑賞する側からいえば、子どもたちの美しさや可能性に感動していくものです。(わたしたち教師は、子どもの美しさや可能性をいかにひきだしていくかが勝負です。)

③特別な衣装は身につけません

いわゆる“劇”は、きらびやかな衣装をつけます。動物役は、着ぐるみを着たりします。総合表現では、特別な衣装をつけません。子どもたちは、自分の体ですべてを表現します。

以前、ある幼稚園の「お遊戯会」で、園児がきらびやかな衣装を着けて登場するごとに、「かわいい」という歓声がありました。本校では、特別な衣装を着けなくても「かわいい、美しい」という歓声をあげさせていきたいのです。どちらが、子どもの可能性を開くことにつながるのでしょうか。

“劇”のように背景画も作成しません。これは、特別な衣装を身につけないのと理由は同じです。

④マイクは使いません

総合表現はマイクを使わず肉声で表現していきます。マイクを使わない理由は、マイクを使うと子どもたちは声を出さなくてもよくなるのです。小声をだしても機械が拡張してくれるからです。本校の児童は、普通の授業でも声の小さい子が多い状況です。自分に自信がないと、大きな声は出せません。教室でもそうですから、体育館で大きな声が出せるようになっていくことは、同時に自信を育てていることと同じなのです。目標は、マイクなしで人を感動させるような声をすべての子どもたちが出せるようになることです。たとえば、「童話・お話大会」に、長田小学校の子どものだれでもが出場できる力をつけさせていくことです。

⑤はだしで表現します

総合表現では、上靴を脱いで裸足で表現します。人間だけが、二本足で美しく立ち歩行できます。美しく立ち歩行できるようになるには、足の指を一本一本じゅうぶんに開いて、床や大地を掴まえることが必要です。上履きをはいては、指が縮こまり床を捉えることができません。

さらに、指先まで表現することが重要です。2年前に、東京バレエ団の公演をみにいきました。「ボレロ」を上演しましたが、指先の演技からはじまりました。手の指先、足の指先の演技が、舞踊の質を決定するといっているくらい重要な役割をしていました。また、おおくのバレエダンサーが裸足で表現していました。

子どもたちが裸足で演技をしているのは、上記のように意味があるからです。裸足になることについて子どもの感想がありました。紹介しましょう。

「川嶋先生から学んだことは、言葉をさいごまではっきり言うことです。今は、それをいしきしています。分かったことは、はだしになると、きれいにおだやかにできるとわかりました。はだしになると、こんなにふんいきがかわるなんて思ってもいみませんでした。できるようになったことは、かたくりの花をイメージし

て、ポーズをすることです。——ここまでできてほんとうにうれしいです。自分のパートとか、歌とかもがんばりたいです。」(Hさん)

「かたくりの花をやるまえと、やった後では、とても成長したと思います。なぜなら、歌を歌う時も、ちゃんとこきゅうのしかたから教えてくれたし、こきゅうのしかたでも声の大きさなどは、変わるという事を、ちゃんと、教えてくれたからです。——わたしは、はだしになることが好きなので、川嶋先生に『はだしになってください。』と、言われた時は、とてもうれしかったです。はだしになることで、楽になり、その分、かたくりの花のろうどくや歌に集中できるからです。」(Eさん)

「はずかしがっていたわたしに、声を出す、歌うということの楽しさをおしえてくれました。それに、体の、手の先から、足の先まで体全体で、表現するという事などもおしえてくれました。——川嶋先生と授業をしていると、かっくにきんちょうがほぐれていきます。」(Kさん)

⑥朗読・歌・体の表現でつくります

総合表現は、朗読、歌、体の表現でつくっていきます。この3つをすべて取り入れるものから、朗読、合唱だけの場合や体の表現だけの場合もあります。選択は、子どもたちの実態や先生たちの経験能力によって変わってきます。

⑦総合表現とは

さて、総合表現とは、学校教育でおこなわれる身体表現活動の一つです。音楽科では歌を歌ったり身体表現をしたり、体育ではダンスや表現運動があります。国語では朗読があります。総合表現は、これらを串刺し発展させたものです。1970年代から本格的にはじまったとりくみです。

今回は、総合表現の特徴を説明しました。ご理解いただければと思います。

次回は、総合表現で子どもの何を育てるかです。